

## 全てOKよ

～木佐茂男先生の妹さん、木佐千代枝さんの写真集発刊～



ゴーヤー洋子(熊本市在住)

ほんわかネット長年の会員である木佐茂男先生(九州大学大学院教授)から、住所変更のお知らせと妹さんの写真集が発刊された、というメールが届いた。

妹さんは、木佐千代枝さんといい、1952年島根県平田市(現・出雲市)生まれ。京都で教師をされていたが、1994年、病の為帰郷。パーキンソン病と診断がおり、闘病の傍ら、花の写真を撮り続けられた。その写した花々は、絵葉書タイプのカレンダーとなり、1998年から2007年まで、10年カレンダーの発行は続けられた。

それ以外にも、カレンダーの添えられた自作の短歌をもとに曲が出来、コンサートも開かれた。カレンダーの写真をもとめた写真集の発刊が企画され、10月初め本は完成の運びとなっていたがご本人はその直前、息を引き取られた。

### メールのやりとり

私は、木佐先生のメールに何か天の啓示のようなものを感じ、急ぎ本を注文した。その本がメール便で到着、まだ封も開けていない時に先生からお電話が。

“私は4人兄弟なんです。この千代枝はすぐ下の妹で、1952年1月の生まれなので、1950年生まれの私とは、年子です。そのすぐ下に弟、そしてちょっと間が空いて一番下の妹の久仁子。(この妹さんが出版のお世話をされている)

### 妹の思い出

千代枝は、年がくつついた兄弟に囲まれ親の愛情が十分に届かなかったのではないかなあ…。大学は京都に行き、そのまま京都で小学校教師に。ずっと故郷と離れた生活を送っていましたが、1992年、40歳で休職。94年、帰郷。闘病生活が始まりました。

でも、帰郷一か月後には、カメラを購入しているんです。それはね…10ページをご覧ください。芽吹きのは春は新鮮で明るかった、とありますね。田舎育ちなのに、

4月、5月に田舎でゆっくりすることなどない生活をしてきたから、本当にそうだったでしょう。

そして、8ページをご覧ください。妹は短歌をやっていたんです。ここに収録されている短歌は、妹の自作です。それから、59ページをご覧ください、障害を持ちながらとても素晴らしい写真を撮られる方、とありますね。妹はその方にいろいろ教えて貰っていたのです。それから、〇ページをご覧ください… “

私はバリバリのキャリアウーマンのように、電話を肩で押さえ、先生の話聞きながら本の封を開けた。そして次から次にページを指定していく先生の熱意に圧倒されるように、必死でページを探した。その熱意というのは、長い闘病生活を送った妹さんに対する深い家族愛だったのではないか。

ここに、先生からのメールをご紹介します。（ご本人の了解を得てあります）

「写真集の発注、有り難うございました。下の妹（久仁子）が大津市より今日発送の予定です。20年の看病、そして写真集の作成、普及で疲れ果てて、昨日は熱を出して休んだようです。

#### 多くの人に読んでもらいたい

長期療養や難病で苦しんでいる方、あるいは、そうした方々の介護者にも見て、読んでいただければと思っています。生前にお世話になったお礼も込めてお送りした方のご両親の世代（70～80代）から、実家の母に対して、涙を出したとか、感動したとかのご感想とともに、他の方に謹呈するのでといった趣旨での発注があるようです。

難病に取り付かれた千代枝は不幸でしたが、ある意味では、このような対応をしてもらえて幸福な一面もあったと思っています。

#### 高級（？）一眼レフのカメラ

私も千代枝の撮影につきあい、彼女が小川の岸の花（確か、赤いクコの実がなる木）を写そうとして、スローモーションの映画を見るような感じで頭から川にカメラごと落ちてしまったことがあります。その瞬間、私も思わず飛び込みました。自分自身がニコンの高級？一眼レフのカメラを首からぶら下げているのも失念して。

実家に二人で帰ったら、私のカメラ本体にも、水が入り、触れると火傷しそうなほど熱くなっており、2台のカメラは当然、おしゃかになりました。

こういうような形で撮影補助をして下さった人の数は、母によれば50人を下回る

ことはないだろうということです。激寒の撮影で、風が止むまで待ち続けた人とかも・・・。

### 1枚の私の写真

この写真集には、裏話は一切書いてありませんが、裏方（特に母）の苦労は相当なものがありました。写真集づくりはもっぱら久仁子が京都で頑張りました。

写真をカレンダーにしたら、と言って下さったのはかつて同僚だった先輩の京都の学校の先生ですが、その写真を葉書サイズのカレンダー形式にしようと提案したのは私。そして、今回の写真集に1枚だけ、私が撮影したものが載っています。印刷会社の方で、千代枝が撮影に使ったカメラそのものの写真も欲しいということでしたので、私がこの8月末に愛用だったカメラを福岡に持ってきて、私のカメラで撮影しました。

あくまで、素人の写真ですから、写真そのものだけを評価されたら、ピンぼけ写真もあって、ひとたまりもありません。毎年のカレンダー用の写真選びも大変でした。私も帰省時とぶつかる際に数回はつきあいましたが、座敷いっぱいに広げても特定の月に適切な写真がない、という年もありました。写真集の全体から、何かを受け止めていただければ大変幸いに思います。」

再び、千代枝さんの本に戻ろう。裏表紙のほおずきの何と綺麗なこと。金のネックレスに包まれた真っ赤なルビーのようだ。先生は素人の写真、と謙遜されるが、どの写真も素晴らしい。技術を越えた何かが、見る人の心を動かす。「自分では動くことのできない花たちが、与えられた場所、その条件の中で精一杯の花を咲かせている姿に心動かされます。」と、千代枝さんは書いているが、その花の姿に自分を重ね合わせていたのではないだろうか。



千代枝さんの写真は、人々の心を動かし、絵葉書タイプのカレンダーとして、1998年から発刊されるようになった。そして、来年もぜひ、と言う声に押されるようにカレンダーは続いて行き、2007年迄10年の年を重ねた。その間に、千代枝さんが詠んだ短歌から歌も出来た。友人が作曲してくれたのだ。その歌を中心としたコンサートも3回開かれた。しかし、病状は静かに進み、カレンダーの写真と短歌、掲載された新聞記事をまとめた本の完成直前、9月20日天国へ旅立って行かれた。

## 本の紹介

木佐先生の話聞きながら、本を見ながら、何度も私の目尻に涙が湧いた。

この本の出版元は、セントプリンティングという京都の印刷会社である。千代枝さんのカレンダーの制作を受けていた所だ。社長さん自ら、「どうしても本にしたい」と熱意を傾けられ、採算度外視で作られたのだそうだ。本に巻く宣伝文（以前は、腰巻とっていたそうであるが）も、上野千鶴子さんから貰う事が出来た。（あの社会学者の上野さんですよ！ 私は大ファンだ。）

沢山の方々の協力、応援があつて生まれたこの写真集、「花想」ご希望の方は、木佐先生まで。定価 1890 円、送料サービスだそうです。振込用紙を同封するので、それでお支払下さいとのことです。（木佐先生の連絡先 kisa.hanaomoi@gmail.com、電話 092-724-3471）



そして、再び木佐先生によれば、表紙にあるススキの写真について、千代枝さんの知人からの礼状にこう書いてあったそうです。

『表紙のススキ、2007年10月の写真ですね。私には“OK”に見えます。』

千代枝さんのあなたの人生は、あたたかな家族とたくさん  
の友人と寄り添い幸せでしたか  
「すべてがOKよ」と聞こえるようなススキ』

はるかお空の上から、千代枝さんはこのOKを見て微笑んでいる事だろう。

### 12頁 「編集後記」（「ドリーム」発行責任者 高木正三氏）

「ゴーヤー洋子さんと木佐先生とのやりとりを再現するような「すべてOKよ！」に兄妹や家族の暖かさを感じます。これを読むと震災に遭われた方がどれだけ苦しんでいるか胸が詰まります。今を生きている私たちが何を残すべきかが問われているようです。

### 18頁 「事務局長便り」（ゴーヤー洋子氏）

「本文にも書きましたが、木佐千代枝さんの写真集に心打たれました。写真も素晴らしいのですが、添えられている文、短歌に心打たれます。その中の一つをご紹介します。ご冥福をお祈りします。『オオバコの花紫と知りし日は散歩の帰りオオバコ踏まず』」